

英国公使館通弁伝吉暗殺一件

著者	宮永 孝
出版者	法政大学社会学部学会
雑誌名	社会労働研究
巻	40
号	3・4
ページ	234-270
発行年	1994-02
URL	http://hdl.handle.net/10114/1796

英国公使館通弁伝吉暗殺一件

宮永 孝

一八五八（安政五）年に徳川幕府が米・英・仏・蘭・露の五カ国と結んだ五つの修好通商条約（「五カ国条約」）は、幕府が列強の力と威圧に抗することができず、不本意ながら締結したものである。幕府は国是であった鎖国政策を放棄し、列強と通商貿易を開始するや、わが国の経済体制は揺らぎだし、その悪影響はたちまち噴出した。巨利を得たのは一部の貿易商や奸智にたける外国商人たちで、一般庶民の暮らしは、物価騰貴や品不足から困窮するようになった。かれらの怨嗟の的となったのは幕府の無策ぶりで、やがてその忿懣の鋒先は在日外国人に向けられ、国民的排外思想（攘夷熱）を惹起するに至った。

もつとも当時、外国人が嫌われたのは別なところにも理由があつた。かれらの観るところ、日本はまだ非文明国であり、国民も無知蒙昧であるとの認識から、来日後も東洋の他の未開国におけるのと同様の態度をとったからである。たとえば、民衆に罵詈雑言をあげせ、騎馬にて街中を疾駆し、あるいは酔った勢いで乱暴狼藉したり、時には市街地やその近郊においてみだりに発砲するといったように、傍若無人にふるまう外国人も少くなかったのである。このような外国人の不遜な態度は、日本人の国民感情を逆撫でし、やがて横浜居留地や江戸を中心に外国人に対する殺傷事件を誘発する一大要因ともなった。外国人は初めのうち、悪態をつかれ、投石を受けたり、不逞の浪士などから体を

ぶつけられたり、時には抜刀などにより脅迫されたりしたが、それが徐々に激化し、ついにはテロや暗殺といった形をとるようになってゆく。

開国後、早くも攘夷の犠牲となった第一号は露艦の乗組員三名である。安政六年七月十八日（一八五九・八・一六）、シベリア及びアムール領総督ムラヴィエフ・アムアスキー Mouravieff Amorsky 伯は、日露修好通商条約の批准交換及びカラフトにおける国境確定の使命をおびて艦隊を率いて品川⁽¹⁾に來航し、兵三〇〇名と共に芝天徳寺に入り、二十三日に批准交換を行なった。同月二十七日（八・二五）の夜八時ごろ、軍艦乗組の見習士官（ローマン・モフェト）一名と水夫（イワン・ソコロフ）および給仕^{メナワード}各一名が食糧品購入のために横浜に赴き、本町通り^{ほんちよう}の店で用をすませて数歩も進まぬうちに、何者とも知れぬ者に襲われた。水夫は頭蓋頭をまっ二つに割られた上、鼻口まで斬下げられ、右肩にも刀創を受け、片腕はかろうじて皮一枚によって体にくっついていた。給仕は左腕に切りつけられるやすぐ商家に逃げ込んだ。その跡を追って二、三名の襲撃者が店内に入ろうとしたが、主人が直ちに戸を閉めたので中には入れなかった。見習士官は袈裟懸けに切られ落命した。攘夷のために命を落したロシア人二名の葬儀は、二日後の二十九日（八・二七）ギリシヤ正教の儀式にのっとり、横浜の増徳院において行なわれ、遺骸は同墓地内に葬られた。またムラヴィエフ・アムアスキー伯は八月九日（九・五）艦一隻を残して帰途についた。

その後間もなく第二の外人殺傷事件が起った。安政六年十月十一日（一八五九・一一・五）の午後六時半頃、横浜のフランス領事代行ホセ・ロレイロ José Loureiro のボーイ（清国人、氏名不詳）は、港崎町脇外国人御貸長屋前通りにおいて、二名の武士に背後から襲われ、左肩下から右腰にかけて長さ九寸五分、深さ三寸ほどの刀創を受け落命した。この清国人は洋服を着、ブーツをはいていたので欧米人とまちがわれ、この奇禍に会ったもので、ロシア水夫らを襲った下山人同様、犯人は逮捕されなかった。

翌安政七年正月七日（一八六〇・一・二九）、こんどは外国帰りの日本人が攘夷浪士のテロに遭って刺殺された。犠牲者は、イギリス公使館（品川高輪の東禅寺）付通弁の伝吉（英名＝Dan-Kirche 又は Dan-Kutci などと綴る）という者である。この伝吉について興味を覚えるようになったのは、タウンゼンド・ハリスの秘書兼通訳であった、ヒュースケンの事蹟を調べるようになってからである。この伝吉とはいかなる素性の人物であったのか。その出自については諸説があり、必ずしもはっきりしない。同人に関する記事として、これまでに紹介されたものとして、たとえば次のようなものがある。――

紀州人善介と申者^{イギリス}咄利人と東海寺^マに同居致し漂流後全蟻人と相成彼の通弁役を致し居（後略）

〔木戸孝九文書巻一（万延元年正月）〕

巷説此夷人は元紀州熊野浦船頭にて先年異国へ漂流せし者なり通俗を熊野伝吉と呼ふと云

〔嘉永明治年間録巻之九〕

さらに「伝吉 英公使館付通訳。元熊野水夫^マ弁吉。帰化名ボーイ・ディアス（後略）」（『幕末維新全殉難者名鑑』新人物往来社）といったものはなだしいのになると土佐説が飛び出、「元来伝吉は土佐の漁夫で、天保の年^か彼有名な中浜万次郎先生等四五名と共に、高知の沖に出漁中、偶々^{たまたま}暴風に襲はれ漂流したのである（後略）」（中里機庵『幕末^{らしゃめん}綿羊娘情史』東京 火爐閣）といったものである。しかし、伝吉がかって乗り組んだ摂津国大石村松屋八三郎の持船「栄力丸」（千六百石積、乗組十七名）の生存者が、清国船（「源宝」丸）にて長崎へ護送せられ、長崎奉

行所において糾問を受けたとき、岩吉の出身を「紀州塩津村」と供述しているし、さらに帰朝者が地方官に出した口書（口述の筆記）にも「紀州加茂郡塩津」とあるから、伝吉は現在の和歌山県下津町塩津の出身であると考えてさしつかえなからう。

安政七年正月七日（一八六〇・一・二九）の午後のことである。駐日英公使ラザーフォード・オールコック（一八〇九―一八七、五九〇―六四在任）は、アメリカ公使ハリスを見舞ったのち、公使館が置かれている東禅寺に戻り、自室にいと、部屋の外でだれかが急いでやって来る足音を聞いた。障子を開けて入って来たのは、たまたま公使館に泊っていた英艦ローバック号の艦長マーテン大佐であった。かれは「早く来てください。あなたの通訳〔伝吉〕が重傷を負って運ばれてきます」と、せき込むようにいった。伝吉は戸板の上にのせられていた。かれは短刀で背中を柄のところで突き刺され、その尖端は右胸の上に出るほどの深手であった。オールコックが声をかけると、目をすこし動かしたが、意識はほとんどないようだった。ときどきくちびるを震わすが、ひとこともしゃべらない。傷口を調べるために洋服の一部をぬがしている間、一、二度けいれんを起こし、その痛みのためか全身を震わすと程なく苦悶することなく息を引きとった、という。

伝吉は思慮分別がなく、短気⁽¹⁰⁾で、高慢な上、気性も荒々しく、みずからイギリス臣民であると称していた⁽¹¹⁾。その性格がかれに不幸をもたらしたようだ。伝吉は人格的にいろいろ問題があつたにせよ、オールコックの日本着任当初、その日本語の知識はひじょうに有用であつたし、オールコックも伝吉のために海外に送りだそうと真剣に考えた、ともいつているから、かれにはどこか見所があつたものであろう。ともあれその死はかねて予知されていたことである。伝吉はイギリス公使館雇いの洋装の日本人として江戸中に知れ渡つていた⁽¹²⁾よう、外出の際も馬を用い、市中でも何かと問題を起した。安政六年十一月五日（一八五九・一一・二八）の夜八時ごろ、かれは乗馬にて芝伊皿子台町の通

りて西丸切手番頭永田帶刀組同心の島田周蔵という者と口論し、たまたま通りがかった外国方上田友助によつて、同町自身番に相手と共に連れてゆかれ糺問を受けたこともあった。⁽¹³⁾ また同年十一月二十四日（一二・一七）の夜七時ごろ、乗馬にて北品川宿三丁目あたりにさしかかったとき、酒に酔つた侍二名に馬から引きずりおろされそうになつたので、相手を鞭で打ち追ひ払つたことがあつた。⁽¹⁴⁾

さらに伝吉は刺殺される数日前に自分を襲つて逮捕されたある大名の酔つた家臣からも恨みを買ひ、また解雇された元英公使館の調理長（日本人）は、「伝^ヂ吉」（伝吉）はだれかに殺される、といつていたという。⁽¹⁵⁾ 幕府側も伝吉がたびたび事を起し、手を焼かせるので暗殺される数日前に外国奉行をイギリス公使館に遣わし、館員のリチャード・ユースデン（通訳官、のち箱館副領事代理）に會うと、伝吉を非難し、すぐ解雇するよう勧めた。⁽¹⁶⁾ いずれにせよ、伝吉はだれの手にかかつて殺されたのか。⁽¹⁷⁾ そして殺害の動機は何であつたのか、未だに真相は明らかでない。伝吉が殺された安政七（一八六〇）年正月七日は、陽暦の一月二十九日であり、日曜日であつた。かれは大通りに近い広場に面した公使館の門を出ると、すぐそばの小道の端にある数軒の家の方に向かい、旗竿のすぐ下の入り口か戸口によりかかつていた。かれの近くには男女や子供たちがいた。そのとき一、二名の男が背後の小路から秘かに伝吉が立つてゐるところに近づくと、その背中に短刀を突き刺した。伝吉は短刀を突き刺されたまま、門番のところまでよろよろと歩いて行つた。門番はすぐかれの背中から短刀を引き抜いたが、伝吉は自分の血の海の中にぶつ倒れた。⁽¹⁸⁾

伝吉が深編笠をかぶつた武士二名の手にかかり絶命するに至つた模様について、オールコックは英海軍ジェームズ・ホープ少将に次のように報じている。（一八六〇・二・四付オールコック書簡）

（前略）先月の三十日の午後四時から五時頃のことです。公使館の日本人通訳（この者は長い間故国を離れ、洋服

を身につけていたが）は、門口の旗竿の下で立っていたとき、背後から短刀を突き刺されました。短刀は柄のところまで突き刺さっておりまして。殺人は白昼、大勢の人がいる公共の場で行なわれたのです。にもかかわらず犯人は逃亡したのです。いったいだれの仕業なのか、犯人の手がかりはまだ発見されておりません⁽¹⁹⁾。

オールコックはまた、本国のジョン・ラッセル外相（一七九二—一八七八）にも伝吉の殺害事件を急送公文書^{デイスパッチ}をもつて報告している。

一八六〇年二月二十一日 江戸にて

閣下

先月の三十日^マのことです。支那から連れて来た日本人通訳は、門口近くの旗竿の下に立っていたとき、短刀を突き刺されました。かれは血をたらしながら私のところに運ばれて来ました。が、程なく死にました。かれは口がきけず、また下手人の手がかりも与えることができませんでした。犯人の顔も見ただけでなく、日曜日の午後のことでした。数ヤードと離れていない所には男女や子供たちがいたのに、当局はいつものように下手人の手がかりは無い、といっております。目撃者の幼い女の子がおり、その話では、小路から二、三名出てきた者がいたとのことでした。その小路は門口の近くが出口となっているのです。門口は小路と家並みの中間にあります。その女の子ははつきりと犯人の顔を見たのです。犯人は背後から通訳の体に短刀を突き刺したのです。短刀は体突き抜け、尖端は胸から飛び出、背中に刺さったままでした。下手人らは期待した効果をあげたので、とどめを刺す必要はなかったのです。

犯人たちがかれを待ち伏せていたことはつきりしております。召使の一人から、お前を殺る計画がある、ということをお教えられていたのです。その召使は銭湯（すべての階層の者がよく行く所）で大名の家来たちがその話をしてゐるのを耳にはさんだのです。だから秘密保持の必要はなかったようです。殺された直接の原因は、私怨によるものでしょう。さらにかれはどの侍からも嫌われ、売国奴のように観られておりました。

いずれにせよ伝吉は、日ごろの驕慢な態度から人の怨を買ひ、ついに命を落したもののようだが、じつは別な点にも原因があつたようだ。中里機庵著『幕末開港綿羊娘情史』（東京 赤牕閣書房、昭和六年刊）は、資料として若干注意して読むべき本であるが、その中に伝吉に関するおもしろいエピソードが綴られている。著者は、別手組杉田麗吉（号は武陵）の手記「伝吉殺し異聞録」をもとに、伝吉について何章か割いているが、それによるとかれは公使館の通弁御用をつとめるかたわら、館員に日本娘を周旋していたらしい。神州の娘を異人に取り持つとは言語道断、外国人誅伐に先立つてまず伝吉から血祭に上げるべし、との考えから東禅寺門前で殺されたのだという。

麻布善福寺のアメリカ公使ハリスや同人の秘書兼通訳のヒュースケンにせよ、小間使メいの名目で日本女性を雇い入れていた。伝吉は公使館員が日本娘に渴していることに目をつけ、口入屋と組んでひと儲けしようと図つたものらしい。江戸在住の各国公使館員は、横浜居留地の異人よりも高等な部類に属していたから、体面上遊女を相手にすることはないし、品川や吉原の妓女たちにしても外国人を客としなかった。伝吉は芝三田の口入屋（三田屋）と露月町ろげつの田原屋に出かけると、異人館に奉公にあがる娘を捜してくれるよう依頼した。娼妓や芸者は不可とし、ふつうの素人娘を希望した。雇用の条件は、月給四十両まで奮発するというもので、契約が成立すれば三カ月分の給料前渡しだ、ともいった。

やがて三田の町田屋から候補者二名がみつかったとの連絡が入った。

(一) 三田のソバ屋「鶴寿庵」の娘……お花

(二) 本芝妙法院の寺娘……お香乃

両人は生娘ではなく、道楽娘のうわさがあり、品行はよくなかった。お花はあでやかで美しく、妖婦のようであり、一方お香乃も男心を誘うような色っぽい美しさがあった。お花の実家鶴寿庵が、人氣娘を異人館に奉公に出そうとした裏には、お定りの借金があり、お香乃の寺にしても内情はよくなかったようだ。両人の洋妾勤めはすべて家のためであった。ところが、鶴寿庵に酒を飲みによって来る客の中に浪士某がおり、ある日のこと、お花は、家のために東禅寺に奉公にあがらねばならない、と泣いて語り、公使館の伝吉なるものが口入屋と相談し、わたしにラシャめん勤めをさせようとしている、と伝吉が奔走したことをぶちまけた。

この話はお花に恋していた野州(やしゅう)(栃木県)浪人桑島三郎(二十五歳)の耳に入ってから事がめんどろになり、浪士らは伝吉に天誅を加えんものと、その機会をうかがった。結局、伝吉をあやめた犯人は、この桑島三郎ではないかという。伝吉が殺害されたとき、お花とお香乃の東禅寺入りの契約がすでに成り、後日両人はイギリス公使館に上がった。文久元年五月二十八日(一八六一・七・五)、水戸浪士らが同公使館を襲ったとき、ある二室のベッドの上に斬り殺された若い娘の死体が二つ発見されたという。⁽²⁰⁾

伝吉の死後数日して、その葬儀が麻布・光林寺(臨済宗妙心寺派)の本堂において、各国の公使館員、二名の外国奉行らの会葬を得て、行なわれ、そのあと柩は寺から墓地へと運ばれ埋葬された。墓石はヒュースケンの墓のそばに今も在るが、墓の正面に――

DAN-KUTCI,
JAPANESE LINGUIST
TO THE
BRITISH LEGATION
Murdered
BY
JAPANESE ASSASSINS,

29th January, 1860.
(21)

とあり、その裏面には日本文字で、

安政七申歳

禅了院伝翁良心居士

正月〔……〕七日

と刻んである。〔……〕内の文字は磨滅しており、判読できない。

また先年、同寺の計らいで万延年間の「過去帳」を見せてもらったことがあるが、それには、

万延元ト改

安政七庚申年

禅了院伝翁良心居士

正月七日 東禅寺外国役所伝吉夏

とあつた。伝吉の享年については定かでなく、おそらく三十半ばであつたと思われる。

なお伝吉の殺害及び葬儀の模様を伝える記事（伝聞）は、『茨城県史料 幕末編Ⅱ』（平成元年三月）に見られるが、次に引くものがそれである。犠牲者の氏名や野辺送りの場所（寺院）などに誤りがみられる。

江戸無名氏来書之由写

去ル七日（安政七年正月七日）イギリス人突被殺（つぎひきつ）十日昼時高縄（ママ）より麻布へ葬送いたし候次第柄相分り不申候何れ士分と申事併シ殺人相分り不申候右異人ハ紀州生（うまれ）ニ而伝三郎（ママ）と申イギリス人之由ニ御坐候扱々きみのよい事 仕候併シ改ハ嚴重尋候事と存候去ル七日高輪ニ而突被殺候紀州伝之助（ママ）と申もの昨十日九ツ半時高輪東禅寺より麻布香龍寺（ママ）へ葬送ニ相成候行列（正月十日）（午後零時半）

一 高張（高張提灯の略） 六張

一 香爐持壹人上下

一 位牌持ハ上下

一 迎僧三人

一 中六尺位
寢棺建二尺位
長六尺位

但白木綿二而棺を巻

異人赤きぬいぐるみ（英国兵の意か）

一 けん付鉄砲 貳十壹挺

異人白きぬひくるみ

一 さし引者（車夫？） 壹人

一 旗三本 イギリス
アメリカ
蘭人

一 見送り異人駕籠 十五丁

注||ルビ及び（）内の注は筆者による。

攘夷浪士らにより非業の死をとげた伝吉の一生はどのようなものであったのか。その生涯はひじょうに波乱に満ちたものであった。伝吉は元漂流民であり、十年ちかく外国を流浪した末にオールコックに拾われて帰国を果した者だが、アメリカと清国で長いあいだ罰せられることのない生活を送ったおかげで性格がゆがんだようだ。これより伝吉の遭難から帰国までの軌跡をたどると、次のようになる。

伝吉が雇われた船は、摂津国（大阪府・兵庫県）大石村松屋八三郎の持船「栄力丸」（千六百石積、乗組十七名）

である。同船の乗組員は次のような面々である。

船頭			
万蔵	(60)	播州加古郡宮西村 漂流三年	サンフランシスコからハワイ島に向う船中で病死。同島に葬る。
楯取			
長助	(49)	摂州八部郡神戸 同	帰国
賄方			
浅五郎	(34)	播州西本庄 同	帰国
甚八	(36)	同所	帰国
幾松	(37)	摂州八部郡神戸	帰国
喜代蔵	(32)	播州東本庄 同	帰国
清太郎	(28)	同州西本州 同	帰国
徳兵衛	(29)	備中浅口郡勇崎村 同	帰国
京助	(31)	讃州安治浜 同	長崎到着後、揚り屋にて病死。
次作	(27)	播州西本庄 同	広東の金星門 ^{チンシマアン} からアメリカの蒸気艦サスケハナ号でアメリカに赴く。
安太郎	(26)	播州加古郡宮西村 同	乍浦 ^{ツァン} より帰国の途次、薩州樺島沖にて病死し、長崎大音寺に葬る。
民蔵	(26)	伊予国岩木浦 同	帰国
亀蔵	(22)	芸州因之島内むくみ 浦	広東の金星門からサスケハナ号でアメリカに赴く。

岩 吉 (22) 紀州加茂郡塩津同

浙江省平湖^{ビツプク}の乍浦にて出奔。のちイギリス公使館通弁。

炊方

仙太郎 (18) 芸州瀬戸田同

上海にてサスケハナ号に一人とどまる。のちの「サム・パッチ」。

茶汲

彦太郎 (15) 播州東本庄同

広東の金星門からサスケハナ号でアメリカに赴く。のちの「ジョセフ・ヒコ」

表方

(浜田彦蔵)。

利 七 (27) 伯州長瀬村同

帰国

注II (一) 内は年齢を示す。この一覧表は「栄力丸漂流記談」「播州人米国漂流始末」「通航一覽続輯卷之百十六」所収の記事を参考とし、それに筆者が手を加えたもの。

嘉永三(一八五〇)年、栄力丸(新造船)は、廻送の荷物(酒、砂糖、荒物など)を江戸に送り届け、帰途浦賀にて大豆、小豆、小麦、くるみ、鰯^{いわし}粕などを積入れ、志摩国大王崎に達した。十月二十九日(一八五〇・一二・二)の夜半より風雨が烈しくなり、船は大北風のために西の方角に吹き流された。船中の者は相談の上、帆柱を切り捨て、十七人とも髪を切り、神仏にすがった。十一月朔日、風は西風に変わり、十二月四日まで船は辰巳(東南)の方角に漂流をつづけた。幸い米穀をたくさん積んでいたので、来春二、三月ごろまで食糧のほうは心配なかったが、やがて薪・飲料水・みそ・醤油などが残り少なくなってきた。栄力丸は漂流以来約五十三日間に九回ほど大暴風雨に遭い、うち三回はとても言葉で表現できぬほどの大時化であった。⁽²³⁾

十二月二十一日（一八五一・一・二二）の朝のことである。賄方安太郎が日の出をおがもうと船端に赴き、さらにはるか西の方角に目を転じると、異国船のようなものを目撃したので、びっくりしてしまふ。栄力丸はとつと帆柱も損も失つていたので、その船に近づくことはできず、一同手をふって救助を請うた。やがてボートが下され、栄力丸のほうにやつて来ると、漂流から五十三日目に十七名全員が救助された。日本人漂流民を救つたのは、アメリカの帆船「オークランド」号（長さ十五、六間、幅三間半、搭乗員十一名）であつた。それより四十三日間、同船は寅卯（東）の方向に帆走をつづけ、嘉永四年二月三日（一八五一・三・五）サンフランシスコに入港した。同港到着後、オークランド号は広東からの積荷を陸揚げし、さらに栄力丸の乗組員十七名は税関用船「ポーク号」（六百トンの鉄船）に移乗を命ぜられ、その後一同は約一年間船中で暮らした。衣類や生活上必要なものはすべて給され、また病気に患らぬようにとの配慮から、時折サンフランシスコに上陸し、市中見物などを行なつた。ポーク号での暮らしが長引くにつれて、帰心はつのるばかりで、いろいろ心配になり、役人らに様子を尋ねると、お前たちのことはワシントン府に伝えてあるので、いずれ早晚連絡が届くはずである。そうなれば早速日本に送り帰してやる、ということであつた。⁽²⁴⁾

嘉永五年二月二十一日（一八五二・三・一一）漂流民一同は、ついに合衆国軍艦「セントメリー」号に移され、帰国の途についた。アメリカ側の意向では、まず日本人たちを香港に送り、ペリー提督の日本遠征艦隊に同行させるつもりであつたようだ。⁽²⁵⁾ セントメリー号はサンドイッチ（ハワイ）諸島に向けて疾走し、同年閏二月十四日（四・三）の朝、ヒロ湾（ハワイ島東部）に投錨した。かねてポーク号やセントメリー号の船医の診療をうけていた船頭万蔵は、入港を目前にして病死したので「南無阿弥陀仏日本万歳」と印木に記して、その地の共同墓地に葬つた。ヒロに碇泊すること九日、やがてセントメリー号は香港を指して出帆し、嘉永五年四月二日（一八五二・五・二〇）香港に到着

した。香港に着いて四、五日たつてから、一同はアメリカ東インド艦隊の旗艦「サスケハナ」号（二四五〇トン、搭乗員三〇〇、艦長はF・ビューキナン中佐）に移乗を命じられた。ある日の暮方、漂流民たちが食事を摂っていると、洋服を着た東洋人が現われ、思いがけなく日本語で「おまえ方は日本の人なるよし、日本はいずれこの国の人なるや」と尋ねた。この不意の訪問者は、力松といい肥前島原口の津の生れで、天保五（一八三四）年秋に難波し、マニラ、マカオを経て香港に住みつき役人になった者であった。その後、一行は力松の家を訪ねたが、当人は役所に行つて留守であつたにもかかわらず、女房はなかなか親切な女で日本食などを出して歓待した。

栄力丸の漂流民らは、同年五月中旬（陰曆）から六月ごろまでサスケハナ号に滞船し、その間に黄埔（ホアンプ、広東の下流一四キロに位置）・厦門（アモイ、福建省南部の港）などを訪れ、再び香港にもどつた。上陸はままならず、許可が必要であつた。月日は移つてゆくが帰国の手がかりはなく、米国軍艦に乗つて日本に行つても、役人に請け取つてもらえるかどうかとも不安であつた。そこで十六名は相談の結果、七名はサスケハナ号に残ることにし、他の九名（伝吉を含む）はひとまず広東に出、そこから陸路南京・上海に出る計画をめぐらした。決行の当日、艦長には、今日は日本の神祭日なので上陸し祝いたい、といつて艦をおりた。六月下旬（陰曆）の某日、九名の漂流民は仲間七名の見送りを受けながら渡し船で九龍（チウ・ルウ・オン、當時は清国領）に上陸し、奥地に通じる山道を二里ばかり進むと、鉄砲や刀やこん棒で武装した六十名ほどの追いはぎと遭遇した。かれらは九名の者を取り巻くと、有無を言わせず、衣服を剥ぎ取り、露銀や方々より携えてきた珍物、アメリカ滞在中に撮つた写真、時計の類などをことごとく奪ひ、下着だけにすると、去つて行つた。漂流民らは途方にくれ、これでは広東に行くことすらできぬ、ともと来た道をたどり香港に戻ろうとすると、またもや十五、六名から成る刀を持った山賊と出会つた。けれど九名の漂流民は、丸裸同然であつたから奪われるものはなく、そのまま香港に戻り、サスケハナ号に帰ることができた。

同年八月、サスケハナ号は香港より金星門（オウシンマア）（広東の下城）に赴き、そこに十月ごろまで逗留したが、日本人は上陸しなかった。その後、次作・亀藏・彦太郎（彦藏）ら三名は、同艦にてアメリカに戻ることにになり、これで栄力丸の漂流民は十三名となった。十一月中旬、サスケハナ号は日本人を乗せて再び厦門に行き、そこで数日碇泊したのち、マニラに向かい、十二月中ごろまで同地に留まり、それより再び香港に戻った。

嘉永六（一八五三）年二月中旬、一行十三名はサスケハナ号で香港を出帆すると、昼夜七日ほど帆走し、やがて吳淞を経て上海に到着した。折から上海在留の外国人や清国人は、鎮江あたりまで迫りつつある長髮賊（タイピンチヤン）の進攻を恐れていた。漂流民たちは騒乱の最中の上海にやって来て、一日として安心できる日はなかった。一行が艦内にいたとき、艦に商いにやって来る清国人商人より、当地に日本人がいることを聞いた。が、ある日のこと尾張国愛知郡尾の浦生れの乙吉（おしきち）というものが不意に訪ねてきた。乙吉は天保元（一八三〇）年十月、尾州の廻船宝順丸（千五百石積、乗組員十五名）で江戸に向かう途中遠州灘で遭難した者で、漂流すること十四カ月、その間に乗組員十二名は死亡し、久吉・岩吉・乙吉（当時十六歳）だけが生き残った。翌年一月、乙吉ら三名はアメリカ西部シアトル近郊のフラッター岬あたりに漂着し、それよりイギリス・マカオに転送され、米国商船モリソン号で日本へ送還されたが帰国できず、そのうちに乙吉は帰国を断念し、今は上海のデント商会（バオシュンヤンハ）に番頭格として雇われている。当時四十一歳であった。

乙吉が突然同胞に会いに来たとき、皆ひじょうに驚き、一応の挨拶はしたけれど、遭難の委細を話す間もなかった。乙吉も他日わが家に来られたし、といって程なく帰って行った。四日ほどして、艦長に上陸許可を願い出、それが許されると一同デント商会（ワンポ）（黄浦江のバンドに面し、税関（ケンナン・ムクラフ）に隣接する）を訪ねると、門番が案内して乙吉宅（間数四）に連れて行ってくれた。乙吉は同胞が訪ねて来てくれたことを大いに悦び、居間に導くと、

身の上話に及び、互いに艱難を事細かに話し合った。いろいろご馳走も出され一同歛をつくしたが、乙吉の女房（シ
ンガポールあたりの出身で、マレー人？）もじつに気さくな女性であった。

やがて漂流民は、帰国したいが、貴殿のお力で便を図ってもらえまいか。われわれが米艦で帰ると、案内したよう
にも受け取られ、帰国が叶わぬかも知れず、日本通いの清国船にでも乗せてもらい、送り届けてもらえればありがた
い、という、乙吉はまず艦長に暇をもらうのが先決で、もしそれがかなわぬときは、わたしがお世話しましょう、
といった。また乙吉はこうもいった。蘇州（上海の西六十五キロ）と南京に船主がおり、その持船四隻は、ここから
二十七里（一〇八キロ）の地にある乍浦長崎間を往復しております。すでに二年もアメリカ人の世話になっているの
を、わたしの方から暇をやってくれと、頼むのはまずいので、そちらから切り出してほしい、と。そこで一同帰艦後、
艦長に暇をくれという、艦長は怪しみ、なぜ暇がほしいのか、と尋ねた。われわれは上海に留って働きたいのです、
といっても艦長は耳を貸さない。細かいことを英語で説明できかねたので乙吉を呼びにやり、代わってかれの口から
頼んでもらうことにした。艦長がいうには、来年（嘉永七）^{（一八五四）}の二月か三月中にわが艦隊は日本へ赴く予定なので、そ
のとき本国に送還するつもりだ、というのである。その後も乙吉がいろいろ掛け合ってくれた結果、ついに芸州瀬戸
田の仙太郎（十八歳）一人を残し、あとの十二名に暇がでた。

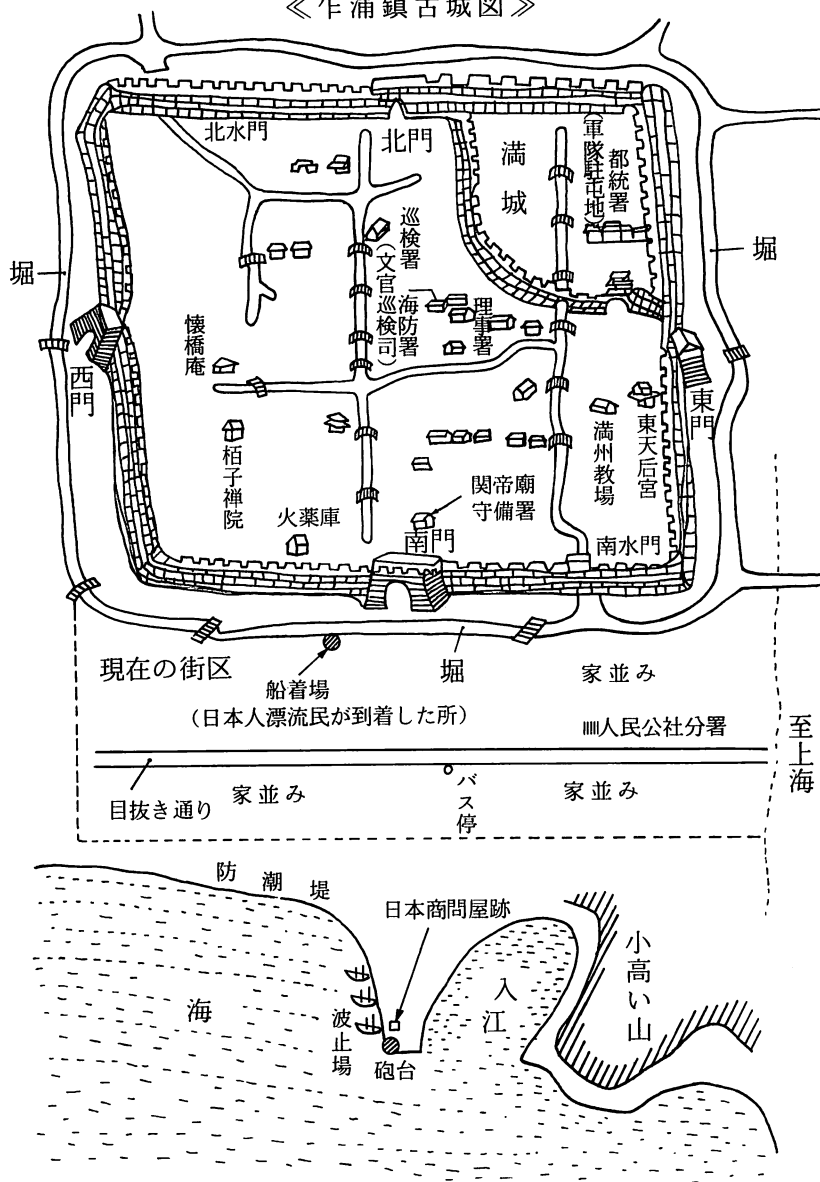
嘉永六年三月朔日（一八五三・四・八）^{（二六）}、十二名の漂流民はサスケハナ号をおりると、デント商会内の乙吉宅に身
を落ちつけた。その夜、一同は足をのばして安眠したという。その後も一同は、引き続き乙吉の住居で起臥を共にす
るのだが、食事は日本と同じように米飯で、平鉢の中に飯を入れ、惣菜には魚や野菜を正油で煮たものを三鉢ほど出
しテーブルの上にならべ、それらをスプーンで取って食べた。なお時折酒なども出してくれた。^{（二七）}漂流民十二名は乙吉
宅の世話になったものの、多人数であるため、その好意をいつまでも甘んじて受けるわけにはゆかぬ、との考えから、

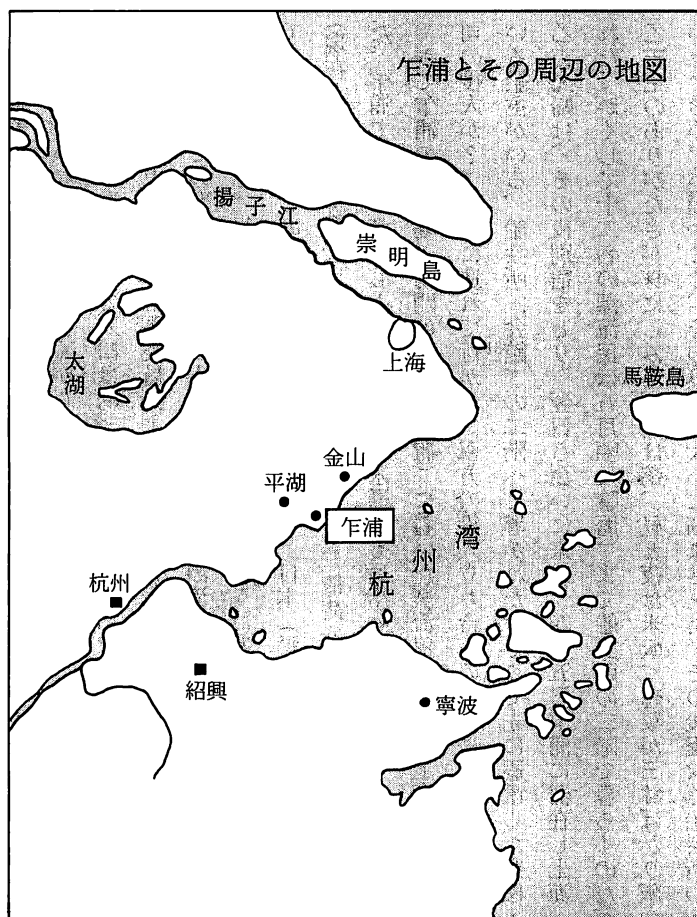
どこでもよいから働らせてくれと頼んだ。乙吉はその気づかいは無用といい、帰国するまでわが家で過ごされよ、といった。乙吉は、紀州の善助（摂津兵庫の中村猪兵衛の持船栄寿丸の船頭）以来、日本人漂流民の本国帰還に六度ほど手を貸し、帰国を断念した今、父母の冥福にもなろうかと思つて、漂流民を世話し、国に帰らせる手助けをしている、のだと語った。

清国では咸豊^{センフー}三年二月十日（一八五三・三・一九）に、南京が太平軍によつて陥落し、つづいて鎮江・揚州までも陥ると上海にパニックが生じ、それに乘じて窃盜や空巢を行なう者がふえ、上海は治安が悪化した。デント商会も警備上人手が必要になり、日本人漂流民を雇い入れることにし、十二名のうち六名は不寝番に、残り六名は乙吉に雇われアヘンの船倉への積入れなどを手伝った。⁽²⁸⁾かくて乙吉宅の世話になること約四十日、その間に日本遠征艦隊の一艦「ミシシピ」号（一六九二トン、乗組員数二六八、艦長S・S・リー中佐）が上海に來航した。このとき同艦の使者が乙吉宅を訪れ、日本人漂流民を返し、サスケハナ号に乗せるようにいったが、乙吉はいったん暇を出された者たちであるから返すわけにはゆきません、といつて断わつた。

太平軍の上海來襲のうわさも沈静化に向かいつつあり、また米艦に連れ戻される懸念も出てきたので、上海を逃れしばらく身をかくした方がよいとの判断から、一同は乙吉に乍浦^{チャウ}に赴き、そこから日本へ帰りたい旨伝えた。乙吉もデント商会の代表（氏名不詳）も日本行を思いとどまらせようとしたが、皆耳を貸そうとはしなかつたので、やむなく、乙吉は十二名の漂流民を連れて城内の道台府を訪れると、城将（呉健彰^{ウヂエンチャウ}）に会つて日本人の帰国を願い出、その許諾を得ることができた。やがて一同は乍浦へ向かい、便船を待つことになった。嘉永六年四月二十日（一八五三・五・二七）の夕刻、漂流民九名はデント商会より饒別銀錢百文（一〇〇メキシコドル）をもらうと、川船二隻に役人と共に分乗し、乍浦へと向かつた。乙吉夫婦も別船を雇い乍浦まで見送つてくれた。翌二十一日は平湖^{ビョウ}とい

《乍浦鎮古城図》





乍浦とその周辺の地図

う所で役人の改めを受け、同所で一泊し、四月二十二日（五・二九）の昼ごろ乍浦に到着した。幾松はすでに乙吉宅から逃亡し、乍浦に向かい、喜代蔵と民蔵も川船を雇って乍浦をさして出奔していたが、のちに仲間九名と乍浦で合流した。日本人漂流民の一行九名がたどり着いた乍浦（Zha-pu）とはどのような所か。そこは浙江省平湖県に属し、平湖の南方杭州湾岸に位置する小さな港町である。五代には鎮（兵営）が設けられ、南宋には水軍を、元代には市船司が

置かれ、外国船の入港も盛んであった。明代に倭寇の侵入を防ぐために城壁が築かれ、清代には海防の要地であつた。⁽³⁰⁾アヘン戦争のときは、一時イギリス軍に占領されたことがあり、そのとき町は戦火により焼けたので、今は古い家並みは残っていない。乍浦は古くから貿易港として栄えたが、上海に貿易の中心が移るようになると、徐々にさびれていった。現在は海運の町で人口は約一万、戸籍上の人口は八千という。

乍浦の郷土史家で鎮志編纂委員会主編の殷水根先生^{インスイゲン}から聞いた話では、乾隆二十年から咸豐十年^{チエンレング}（一八世〜一九世紀）までの間に六十一回、六百余人の日本人漂流民が乍浦に来ており、そのうち四十二回、約四百名の漂流民が日本に帰された。乍浦で病死した日本人も多いという。栄力丸の漂流民がやって来た咸豐時代、乍浦の戸数は約一万であつた。日本との貿易も盛んで、蚕を輸出し、日本（長崎）からは竿銅を輸入した。清国人経営の「日本商問屋」^{ヤヘンシヤウイン}（現在ある「天妃宮砲台」のとなり位置）もあり、積荷の検査や出入国の審査などを行ない、日本人は同所に宿泊した。乍浦では日本商品もよく売られ、寛永通宝も通用したという。

さて乍浦の船着場（南門の近くに位置）に着いた漂流民九名は、上海役人の人別改めを受けたのち船手の官（市船司の役人か？）の所に連れて行かれ、双方の役人立ち合いのもとに乍浦側に引き渡された。それより日本と交易している船主がいる、船会所（会館）⁽³¹⁾の二階へと導かれた。そこで先に逐電した幾松・喜代蔵・民蔵ら三人と再会した。乙吉夫婦は、その夜別宿をとり、翌日も会いに来た。四、五日乍浦に滞在し上海へ帰って行つたが、お互い泣いて別れた。かくして十二名の漂流民は五月頃（陰曆）まで船会所の二階で暮らすのだが、食事のまずさに閉口し、改めて乙吉宅のありがたさが身にしみた。朝は粥、昼と夜は米飯、惣菜が三鉢ばかり飯台の上に出るのだが、米の質はわるい上におかずが脂っこく、その臭気に大いに悩まされた。その後程なく船会所の本宅（番頭などが住む）のほうに移された。しかし、住居はよかったものの、食事は相変らず悪かった。やがて長崎弁を話す通詞一名（漂流民）と付き

添い一名がつけられた。だが、外出は自由ではなかった。八月八日（九・一〇）には寺参りが許され、十月十日（一・一〇）には蘇州より薩州の漂流民十七名が乍浦に送られて来、同部屋に住むことになった。

年が改まって嘉永七（一八五四）年正月、乙吉夫婦が上海から見舞いに乍浦を訪れ、漂流民と再会を喜びあった。互いによもやまの話をするのだが、その折アメリカの日本遠征艦隊の様子を尋ね、また乙吉からは昨年の八月五日（二八五三・九・七）に上海城が「小刀会」シャオダオハイ（匪徒）に占領されたニュースが伝えられた。

本稿の主人公岩吉についてはしばらくふれずに来たが、ここでかれの名前が浮上するのである。嘉永七年二月二十二日（一八五四・三・二〇）の夜、岩吉は置き手紙をし、突如乍浦を出奔するのである。その主旨は次のようなものであった。

昨年此所（乍浦——引用者）に來りしより、渡海の事のみ日夜相待居れども、一向に出船無之。これなくさすれば当年夏船も無覺束、しかのみあらず此所は食物も甚あしく、其故皆々共多く煩ひ申様の仕合（ありさま——引用者）、此余長居致さば命も続きがたくおもふ也。されば何国へなりとも駈落して、身の住家を拵へ、永住の計をなすにしかず。

（「柴力丸漂流記談」）

岩吉が乍浦より逃亡した理由がこれだが、漂流仲間のかれの姿が忽然と消えたことに驚き、直ちにその旨を通詞に伝え、さらに通詞から番頭、船主にも伝えられた。けれど船主は役所には連絡せず、そのままにして置いた。五月ごろになると、日本へ行く船があると聞いて一同大いに喜んだ。

六月初旬に至り、船主と共に役所（市船司）に出かけ、帰国を願うと、ようやく聞き入れられ、夏に船二隻を

出すから、それに乗って帰国するよう申し渡された。六月二十九日（七・二三）漂流民一同は役所に呼び出されると、人別改めが行なわれた。このとき岩吉一名が欠けているのが問題となり、通詞・番頭らはきびしく取調べられた上、出奔した岩吉を捜してくるよう命じられた。いろいろ探索した結果、岩吉は上海の「英吉利屋敷」（デント商会か？）にかくまわれているらしいことがわかった。が、連れ帰ることができないので役所の手前、七月五日上海で病死したことにし、その旨届け出、事なきを得た。嘉永七年七月八日（一八五四・八・一一）薩州の漂流民らは「豊利」号で、二日後の七月十日（八・三）には柴力丸の漂流民十一名が「源宝」号に搭乗し帰国の途についた。帰帆のとき、船主の番頭二名は、漂流民らの面前で百叩きの刑を受けたという。その後、源宝丸は同月二十二日薩摩国羽嶋に寄港したのち、二十七日（八・二〇）長崎に着船した。

乍浦から逃亡した岩吉のその後の足取りだが、おそらく川船を用いて上海に戻ったものであろう。上海に戻ったかはどこに身を寄せたのであろうか。乙吉のいるデント商会か。それとも市中に身をかくしたものか。筆者の手元には、これらの疑問に答えてくれる資料は無い。が、その後岩吉は琉球の那覇を経て香港に向かった節がある。ペリーの遠征艦隊に属する運送船「レキシントン」号（六九一トン、乗組員四五名、艦長J・J・グラソン大尉）は、一八五四年五月（嘉永七年四月）に下田より琉球に引き返し、同年七月ごろまで那覇に碇泊した。そのときのことである。

艦隊が那覇に碇泊中に如何なる身分のものであるかは不明だが、琉球に在った一日本人が衣類をまるめてそれを持ち、海岸からレキシントン号に泳ぎついた。艦上に迎へると合衆国に連れて行ってくれと願った。レキシントン号を指揮していた士官は彼を旗艦（ミシシッピー号——引用者）に送った。そして提督（ペリー——引用者）は、日本当局から同意を得たならば少しも反対しなかったであらうが、而も日本では臣民が同王国を離れることを嚴重に禁じて

いることを知って居たし、又用心深くも日本を怒らしめないやうにしようと心を用ひて、その男を迎へないことを拒絶し、再び彼を陸に送り返へすやう命じた(略)⁽³²⁾。

この正体不明の日本人はいつたい何者であつたのか。『ペリー提督日本遠征記』の記述の脈から、この日本人こそ伝吉であるように思えてならないが、後考を待たねばならぬ。ペリー提督を乗せた旗艦「ミシシッピ」号が、サザンプトン号を従えて那覇をあとに香港へ直行したのは一八五四年七月十七日(嘉永七・六・二三)のことである。が、香港到着の日時については不明である。ともあれ、岩吉の姿は香港に現われ、米艦に便乗を請うのである。

ミシシッピ号が帰途支那(香港——引用者)に帰るや、他の日本人一人も合衆国を訪問し度いと希望を述べてその願ひを許された。これは前に一寸述べた青年であつた。彼の日本名はダンスケヴィッチ Dans Kevitch といふ名に似たものであつたが、漂泊の生活を送つて来た者に名前をつけるのを好む水夫達は、例の通りにすぐ彼をダンケッチ Dan Ketch と名付けた。水夫達の間にもっと普通に行はれている船員固有の渾名をつけられることから脱れたのは、この哀れな者にとつて幸せだつた(略)。

ダンは提督の保護をうけつゝ、非常な才能と熱心な知識欲とを発揮している。今彼が目指している通りに、もし吾が国についてもつと色々と知つた後に日本に帰るならば、疑もなく彼は吾が国に関する少からざる知識を彼の祖国にもたらすことになるであらう。⁽³³⁾

あれほど帰国の夢を捨てきれないでいた岩吉は、流浪の果てに再び香港に舞い戻つたのであろうか。かれはミシシ

ツピ号に搭乗を許されたというから、同艦と共にケープホーン（南米最南端）経由でアメリカ本土に赴いたものであらう。一八五六（安政三）年、広東領事に就任したオールコックは、二年後の五八（安政五）年春、駐日イギリス公使に任じられ、翌五九（安政六）年六月二十六日（五・二六）イギリス軍艦サンブソン号で江戸湾に到着するのだが、同艦には伝吉が乗り組んでいたのである。アメリカに赴いた伝吉が、いつ東洋に舞い戻り、いつどこでオールコックと知り合い、遭難以来約九年ぶりで帰国の夢を果たすことができたのであろうか。伝吉がオールコックと面識を得、その通訳に採用されたのは広東であつたようだ。その伝吉も帰国して約七カ月後にじつにあつけない最期を遂げたのである。

伝吉の死はいかなる意味を持っていたのであろうか。英公使館の一使用人とはいえ、かれは英国籍を持っていたようだから、その死が国際問題を惹起する可能性もあつた。だが、結局英政府は犯人逮捕と処罰を厳しく求めるだけにとどめたのである。伝吉の暗殺後もさらに外国人に対する殺傷事件が頻発した。万延元年二月五日（二・二六）横浜に上陸した蘭船の船長二名（デ・フォスとデッカー）が本町において斬殺され、同九月十七名（一〇・三〇）には、フランス公使館（三田濟海寺）の召使（イタリア人ナタール）が、公使館の門前で飼犬をけた武士と口論したあげく、相手の刀により被傷するといった事件が起つた。いづれの場合も下手人は逃走し、犯人は逮捕されずに終つた。こうした一連の殺傷事件は在日外国人の間に恐怖の念^{パニック}を起し、テロリストに対して何ら有効な措置を講じない幕府に対して業を煮やした英仏蘭の外交団は、ついに共同で強硬な抗議を行ない、それをさらに有効にするため莫大な償金と犯人の厳重追捕とを要求した。しかし、三月三日（三・二四）の桜田門外における大老井伊直弼の遭難、十二月五日（一八六一・一・一五）のアメリカ公使館付通訳ヒュースケンの暗殺などが引き金となつて、アメリカを除く、英仏蘭の代表は、生命の安全と利益を守るために自衛せざるを得なくなり、合わせて幕府に対して有効なテロ対

策と反省の機会を与えるために、一時江戸を退去することに決し、横浜・長崎に引き揚げた。しかし、各国代表が採ったこういった措置は、幕府に対して十分に意義あらしめず、何ら改善の機会を与えずに終ったのである。

注

- (1) ムラヴィエフ・アムアスキーの艦隊は十隻から成り、その内訳は、コルベット艦一隻、残り九隻は砲艦であった。
J・ラッセル外相宛 R・オールコック書簡(一八五九・九・三付)。(マイクロフィルム)
- (2) R・オールコック宛神奈川英領事館書簡(一八五九・八・二七付)。(マイクロフィルム)
- (3) 同右。
- (4) John M. Brooke's Pacific Cruise and Japanese Adventure, 1858-1860, University of Hawaii Press, 1986 の一六三頁。
- (5) Mr. Keswick 宅の近くか。英外務省宛 R・オールコック書簡(一八五九・一一・八付)を参照。(マイクロフィルム)
- (6) 仏外務省宛デュシエヌ・ド・ベルクール仏総領事書簡(一八五九・一一・七付)。(マイクロフィルム)
- (7) 「通航一覧総輯百十六 北亜墨利加部十三 漂流」を参照。
- (8) 「播州人米国漂流始末」(石井研堂編『異国漂流奇談集』(新人物往来社、昭和四十六年十二月)。
- (9) 山口光朝訳『大君の都(中)——幕末日本滞在記』(岩波書店、昭和六十二年九月)の六五頁。
- (10) 同右、六三頁。
- (11) Jonkheer Dirk de Graeff van Polsbroek: Journaal 1857-1870, Van Corcum & Comp, 1987 の五五頁。
- (12) J・ラッセル外相宛 R・オールコック書簡(一八六〇・一一・二二付)。同書簡は Despatches from Mr. Alcock, Her Majesty's Envoy Extraordinary and Minister Plenipotentiary in Japan. Presented to both Houses of Parliament by command of Her Majesty. 1860. London: Printed by Harrison and sons (マイクロフィルム)に収められている。

- (13) 『大日本古文書』（幕末外国関係文書之二十九）の二五二、二七一、二七二頁を参照。
- (14) 『大日本古文書』（幕末外国関係文書之三十）の二四六～二四七頁を参照。
- (15) 註の（9）の六八頁。
- (16) 註の（9）の六七頁。
- (17) 『幕末維新辞典』（新人物往来社）の二三四頁には、「洋妄伝吉こと小林伝吉（英国公使館通弁）高輪泉岳寺門前町において、浪士丸橋仙十郎、久留晋三郎、大橋寿吉郎らに斬殺される」とある。
- (18) 註（9）の六五～六六頁。
- (19) 註（12）所収のオールコック書簡（二八六〇・二・四付）。
- (20) 中里機庵『幕末綿羊娘情史』（東京 赤牖閣書房、昭和六年）の二二八頁。
- (21) 伝吉の墓の碑文は磨滅しており、判読は難であるため、左記の書より原文を引いた。Francis Otiwell Adams, F. R. G. S. : The History of Japan vol. I. — 1853 to 1864 With a sketch of the Earlier Periods. Henry S. King & Co., 1875 の一二三頁を参照。
- (22) 註（9）の六五頁。
- (23) 「栄力丸漂流記談」（『海表叢書巻三』（更生閣書店、昭和三年三月）の一五頁。
- (24) 同右、二二頁。
- (25) 土方久徹 藤島長敏共訳『開国逸史アメリカ彦蔵自叙伝』（ぐるりあ そさえて、昭和七年十月）の七六頁。
- (26) 註（8）の三〇一頁。
- (27) 註（8）の三〇三頁。
- (28) 註（23）の七二頁。
- (29) 「長瀬村漂流談」（『日本庶民生活史料集成 第五巻』三一書房、昭和五十五年三月）の六七六頁。
- (30) 『世界地名大辞典7 アジア・アフリカII』（朝倉書店、昭和四十九年三月）および『中国歴史地名大辞典』（凌雲書房、昭和五十五年十月）を参照。

- (31) 殷水根先生によると、同治時代（一八六二〜七五）、乍浦にこの種の会所が二十カ所あったという。
- (32) 土屋喬雄
玉城肇共訳『ペリー提督日本遠征記（四）』（岩波書店、昭和四十八年十一月）の二二〇頁。
- (33) 同右、一八七〜一八八頁。
- (34) J・ラッセル外相宛R・オールコック書簡（一八六〇・一一・二六付）。〔マイクロフィルム〕

〔追記〕

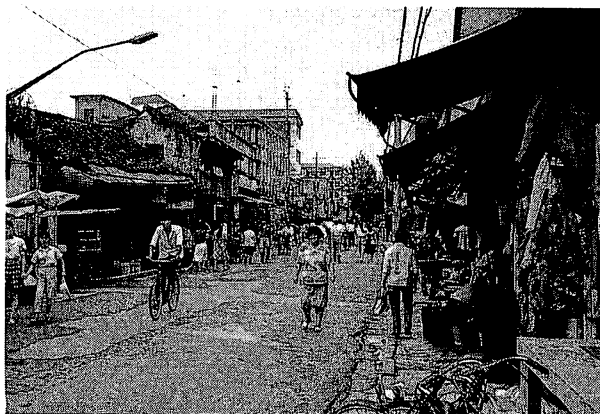
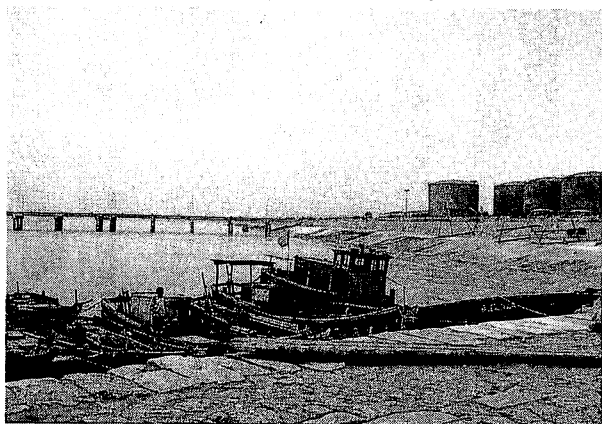
平成五年の盛夏、筆者は上海に遊んだ。その折、友人の莊宏偉氏と共に乍浦に赴いた。早朝に起きると、天潼路のホテルからタクシーに乗り、上海長途汽車公司がある西區站まで行き、そこで海塩市行きの汽車（バス）に乗り、乍浦で降りた。雨漏りのするオンボロバスに乗り込んだのは午前六時半ごろで、曇天の中を出発した。上海から乍浦まで約一〇八キロだという。バスは市内を抜けると、並木のある街道に出、そこを南西に向かってひた走った。やがて雨がふり出し、それが窓を打ちつけるようになる。天井から雨がぼたぼた落ちてきた。後部座席はとくにそれがひどく、あちこちで乗客は傘をさしている。車窓には水田、柳の樹、小川、農家などが見られ、雨にぬれた緑も色あざやかである。やがて雨も上がった。目ざす乍浦に着いたのは午前十時半ごろであった。

乍浦は中国のどこにも見られる平凡な田舎町である。かつては貿易で栄えた町だというが、そんな印象を与えない。黒い色の古瓦の家も見られるが、それらは七、八十年前のものらしい。郷土史家の殷水根先生の話だと、新しい建物がつくられるようになったのは、一九四九年以後だという。期待していた城壁（明代洪武十九年に建造したもの。その周囲は中国の里法で九里十三歩〓約四、五キロ）もほんのわずか残すのみであった。日本人漂流民が帰国の途にいた港は、旧城（乍浦鎮）の南門外に位置し、今は沿海一帯に石を積んで防潮堤としている。天妃宮砲台（一八八四年に造られた）のそばに波止場があり、運搬船が数隻碇泊している。海の色は褐色である。港一帯に静寂が支配しており、人影もまばらである。うすもやの立ち込めた沖合いの杭州湾を大小の船が行き来している。今ある波止場のとなりは入江になっていて、そこに大きな廃船が船体を半分水中に沈めている。入江の周辺を緑の小高い山がとり囲んでいる。その風景は日本の山水を想い出させるもので、日本人漂流民も乍浦滞在中郷愁を感じたものにちがいない。

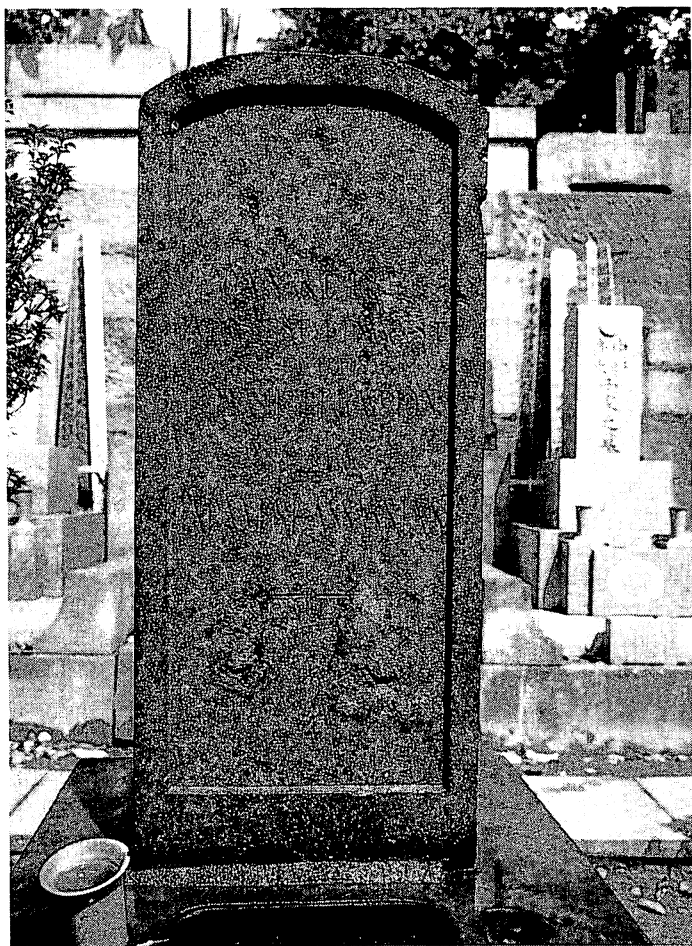


乍浦の波止場から
見た杭州湾
(筆者撮影)

乍浦の防潮堤と波
止場
(筆者撮影)



乍浦の南門外に通
じる通り
(筆者撮影)



麻布・光林寺禅寺裏手の墓地にある伝吉の墓（正面）〔筆者撮影〕

い。街中と港の見学をすませたのち、乍浦の人民政府分署に戻り、莊宏偉氏の通訳で殷先生に質問したり、町の沿革について説明をうけた。近く『乍浦新志』の刊行が予定されていると聞いた。

午後三時ごろ、乍浦より金山行のオンボロバスに乗り、一時間半ばかり田野の中を走ると、金山に着いた。六時四十五分発の上海行の汽車が出るまでだいぶ間があったので、駅の踏み段のところにしゃがみ間食を摂った。上海に戻ったのは午後八時四十五分、もうあたりは真っ暗であった。

本稿を草する上で東京大学史料編纂所、早稲田大学中央図書館、乍浦の人民政府分署などのお世話になった外、個人的にはガイドと通訳の労を惜しまなかった莊宏偉氏、そして乍浦の歴史について教示を得た殷水根先生の協力を得ることができました。記して感謝を表します。

daylight, in a public place, with many people about, and yet the perpetrator escaped, nor has it yet been possible to obtain any trace of who it is".

Iwakichi⁽³⁾ was in fact the third victim killed by the anti-alienists, following the cases of killing and wounding three of the crew of the Russian squadron under the command of Count Mouravieff Amoor-sky in August, 1859, as well as the murder of a Chinese manservant hired by José Loureiro, the French Consulate in Yokohama in November of the same year.

It goes without saying that the perpetrators of the cases mentioned above were not arrested or punished by the authorities. A few days after Denkichi's death, the funeral was held at the Korinji temple (光林寺) at Azabu in Edo, being attended by the legation staffs of the Powers and two Foreign commissioners of the Bakufu. The coffin of Denkichi was buried near at the grave of H. Heusken, the secretary and interpreter of Townsend Harris, the U. S. Minister to Japan. The inscription of the Denkichi's gravestone reads illegibly as follows:

DAN-KUTCI.
JAPANESE LINGUIST
TO THE
BRITISH LEGATION
Murdered
BY
JAPANESE ASSASSINS.
29th January, 1860.

Notes:

- (1) Narrative of the Expedition of an American Squadron to China Seas and Japan, A. O. P. Nicholson Printers, 1856. page 497
- (2) *ibidem.*, page 486
- (3) Mr. Alcock to Rear-admiral Hope, Yedo, February 4, 1860.

Takashi Miyanaga
Tokyo, 30 September, 1993

lying at anchor at Napha, a native of Japan, who was in Lee chew, in what capacity we know not, swam from the shore to the Lexington with a bundle of clothing, and begged to be received on board and to be brought to the United States” The name of the Japanese is unknown, but he must have been Iwakichi⁽¹⁾. Though he had to land on shore again, however, he tried to be brought to the States again.

When the flagship Mississippi was on her way home and at anchor at HongKong in July, 1854, Iwakichi begged to board the warship. “On the return of the Mississippi to China, on her way home, another of the Japanese expressed a desire to visit the United States, and was gratified in his desire; this was the young man whom we have mentioned on a former page. This Japanese name is something like *Dans-kevitch*; but the sailors, with their usual fondness for christianizing those adopted into their loving family, soon called him *Dan Ketch*”⁽²⁾.

On his return to China, Iwakichi betook himself to Kwangtung where he was hired as an interpreter by R. Alcock (1809-97), the first English Minister to Japan. On the 26th May 1859, Denkichi, R. Alcock and his suite arrived in Edo Bay. Denkichi was able to return home after about 9 years’ absence. As regards his eleven mates left at Zha-pou, they left home on board the Chinese junk the *Yuanbao* (源宝), arriving safely in Nagasaki on the 20th August, 1854.

R. Alcock established the British Legation at the Tozenji (東禪寺) in Edo. Soon after beginning to live in Edo, Iwakichi began professing to be a British subject, and conducting himself recklessly. He was short-tempered and arrogant, went on horseback, and dressed in foreign clothes. Sometimes his haughty attitude caused much troubles with anti-alienists and finally it cost him his life.

It was on the 29th of January, 1860, that Denkichi was stabbed to death by two samurais wearing deep straw hats (worn by old-time Japanese to hide their faces) near the gate of the Legation.

“On the 30th ultimo, between 4 and 5 o’clock in the afternoon, the Japanese linguist of this establishment (long absent from his country, wearing European costume), while standing at the gate, under the flag, was thrust through from behind with a short sword, which was left in his body buried to the hilt. The murder was committed in broad

once on the U. S. merchant vessel, 'Morrison', but had not been able to land in his native country. As a result he had long given up any idea of returning home and had resolved to help fellow countrymen wishing to go home. Both Otokichi and his wife (a Malayan?) showed every kindness to the thirteen Japanese when they received them.

On the 8th of April, 1853, the thirteen Japanese left the *Susquehanna* through the good offices of Otokichi and they lodged in his house. Later they were hired by Dent and Co., as clerks and guardsmen.

When the *Mississippi* (1692 t.), under the command of Commodore Perry's Japan expedition landed at Shanghai, the Japanese tried to get back to the U. S. warships. They thought it better to hide themselves somewhere for a while and if possible, they wanted to find a chinese junk which might take them to Japan.

Not only Otokichi but the head clerk of Dent and Co., dissuaded them from going back to Japan, because it seemed still premature. However they stuck to their opinion. Otokichi was beaten and finally got permission to return home for them. In the meanwhile, three men (i.e. Ikumatsu, Kiyozo and Tomizo) ran away from Shanghai, proceeding to Zha-pu (乍浦), 108 km in the southwest of Shanghai in Tche-kiang province (浙江省).

On the 27th May, nine Japanese, being accompanied by some officials, Otokichi and his wife, embarked in river boats, and made for Zha-pu. On arriving there, after a few days the Japanese were extradited by the authorities and were taken to a ship club, *chuan-huisuo* (船会所), where they met the three mates. The Japanese were confined in the club and had to put up with many inconveniences.

It was on the night of 20th march, 1854, that Iwakichi fled from Zha-pu, leaving a note behind. His message was as follows; There was no hope of returning home. Since the food was poor, if lived there long how could they support their lives? So he wanted to escape from Zha-pu in order to find shelter in some country. His whereabouts remained unknown, though inquiries were made.

However it seems that he went first to Shanghai and later to Napha (那霸) in Lee Chew, in July, 1854. "While the squadron was

home. The U. S. Government had intended the rescued Japanese to accompany Commodore Perry's Japan expedition. The St. Mary arrived in HongKong on the 20th of May, 1852, dropping off en route at Hillo in Hawaii island where Manzo, a boatman, died of sickness and was buried there. Four or five days after their arrival in HongKong, the sixteen Japanese were ordered to embark on the Susquehanna (2450 t.), the flagship of the U. S. East India Squadron. It was in the Susquehanna that the castaways met by accident another Japanese, Rikimatsu (力松), who had been shipwrecked in the autumn of 1834, and was then a resident in HongKong. The Japanese castaways lodged in the Susquehanna towards the end of June during which she stopped at Hoang-pou (黃埔), in Kwangtung and Amoy (廈門), before returning to HongKong.

As time went by, however, as the Japanese had no chance to return home, they decided to divide themselves into two parties. Seven men made up their minds to stay on the Susquehanna and the rest resolved to leave for Shanghai (上海) by land via Kwangtung, Nanjing (南京). Nine men (including Denkichi), who disembarked from the Susquehanna left HongKong for Kwangtung, were waylaid by footpads on a mountain path in Kieou-long (九龍) and robbed of everything they had. Consequently they had to retrace their steps to HongKong and they returned to the Susquehanna.

In September, 1852, the Susquehanna left HongKong for Kinxingchuan (金星川) in Kwangtung, staying there until October. Thereafter three Japanese (i.e. Jisaku, Kamezo and Hikotaro alias Hikozo) left for America. In December of the same year, the Susquehanna left for Amoy and then headed for Manila in Luzon island, returning back to HongKong again.

In the middle of January, 1853, the thirteen Japanese left HongKong for Shanghai on board the Susquehanna, arriving in Shanghai about one week afterwards. One day after arriving there a Japanese named Otokichi (乙吉) alias Ottosan had an interview with the Japanese on the Susquehanna. He was also a castaway, who had been shipwrecked by a storm in November, 1830, then working for Dent and Co., (宝順洋行) as a clerk. Otokichi had been sent home

The Assassination of Denkichi alias *Dan-kutci*, a Japanese linguist to the British Legation in Edo.

This article concerns the murder of a Japanese castaway named Denkichi (伝吉) who was born in Shiotsumura in the county of Kamo, Kishū province (紀州加茂郡塩津村), (the present-day Shiotsu, Shiotsu town, Wakayama prefecture). His background is obscure, but it seems to me he suffered many vicissitudes during his life. About 7 months after returning home, he was killed by the two samurais in Edo. He was then working for the British Legation in Edo as an interpreter. He was formerly one of the crew of the *Eirikimaru* (栄力丸), a ship owned by Hachisaburo Matsuya (松屋八三郎), a resident of Ōishimura in Setsunokuni (摂津国大石村).

In the early winter of 1850, the ship was on its way home from Edo, carrying a cargo of soybeans, wheat, walnuts and sardines pickled in sake lees. On the night of 2nd of December, however, she was overtaken by a storm and began to drift at the mercy of the waves. Seventeen men on board the ship prayed for divine protection, cutting their own topknots and sawing down the mast. Thereafter the dismasted ship continued drifting on and on to the southeast. Since the ship was carrying enough provisions, there was no fear of starvation. The drifting continued for about 53 days during which the *Enrikimaru* encountered great storms 9 times. Three of these storms were beyond description.

However, the *Enrikimaru* was lucky enough to encounter and be rescued by an American sailing vessel, the *Auckland*. On the 5th of March, 1851, after voyaging for 43 days, the ship finally pulled into the port of San Francisco. Soon after, the *Auckland* began unloading goods from Kwangtung (広東). The seventeen Japanese were, thereafter, ordered to board the *Polk* (600 t.), a steel-bound ship used by the U. S. custom house and they lived on the ship for about a year.

On the 11th March, 1852, all Japanese castaways were ordered to board the *St. Mary*, a U. S. warship, and to start on their journey